

✿ 韓日発掘調査交流に参加して

韓国・国立慶州文化財研究所と日本・奈良文化財研究所が2006年度に取り交わした「韓日共同発掘調査交流協約」に基づいて、私が日本へ派遣される旨を聞いた時、果たして私にできることはなんだろうか、という不安や心配が頭に渦巻いていました。

というのも、これまでの私は、日本語は無論のこと、日本の歴史や考古学についてもあまり知識を持っていなかったためです。訪日前の短期間に日本語を習得することは難しかったため、日本の歴史や文化に関する本を読んでおくことが、日本滞在中に少しでも助けになるのではないかと考えていたことが思い起こされます。

日本には2010年2月8日～3月20日まで滞在し、その間、甘樫丘東麓遺跡と平城宮東方官衙の2ヶ所で発掘調査に従事しました。甘樫丘東麓遺跡が当時の天皇よりも強力な権力を握っていた蘇我氏の邸宅に関する遺跡である点や、平城宮東方官衙が掘立柱建物と礎石建物を対照的に配置している点などについて、新羅月城周辺の調査を担当している私には、互いに類似しているという印象を受けました。

調査の間は、英語や韓国語を用いて研究員の方たちと対話を重ね、遺跡の解釈についても話し合うことができました。特に、傾斜面に位置する甘樫丘東麓遺跡の地形について、誤差を少なくするためにデジタル3D測量と人間の手による実測を合わせておこなう調査方法を学んだことや、平城宮東方官衙において、礎石建物の重複関係を研究員と検討できたことは、良い経験となりました。また、発掘調査中におこなう作業として、韓国とは異なる点も参考になりました。特に、遺構確認の状況を略測したカード（遺構カード）を作成し、その変化を日々修正していく姿はとても印象的でした。

発掘調査以外でも、例えば研究所の展示室や整理作業室を見学することも、私にとってはまるで宝物船の中を散策しているような感覚でした。韓国の遺物と似ているけれども、違いのある土器や瓦類、慶州では出土例がそれほど多くない良質の木材・木製品、収蔵庫いっぱい保管されている木簡、金属製品などを見学することができました。特に、土器と瓦の編年体系が確立しており、発掘現場において遺物が発見されれば、比較的簡単にその年代を知るこ

とができる基準資料室は、私たちの研究所においてもすぐに準備しなければいけない、と改めて思いました。また、奈文研では資料整理が着実におこなわれ、考古学的な発掘調査の成果や研究資料に関するデータベースが整っており、研究所の調査研究の歴史を振り返ることは、それほど難しいことではないのだらうな、と考えました。

また、一つのシステムを長い熟考の後に構築し、その後は大きな変更を加えずに維持していく奈文研の姿勢と、とりあえずシステムを導入し、その後に随時修正していく私たちの姿勢とでは、大きな違いがあると実感しました。例えば、発掘現場で、私が訪問した時期には未だにデジタルカメラを使用していなかったことには驚きました。しかし、デジタル化した際の資料の検索や閲覧、その他の様々な問題に備えて、検討を重ねている姿を見て、私たちも見習わなければならない部分があると感じました。

日本についてこれまで無関心であった私が、日本において生活できたのは、田辺所長をはじめとする多くの方々のご配慮のおかげです。発掘現場に参加し、周辺の様々な遺跡を見学することで、日本の古代文化を形づくったのはどのような人々なのか、どのような政治的な変動を経たのかなど、日本の歴史についての理解を広げることができ、本当にありがたいと思っています。静けさのただよう飛鳥・藤原を自転車で周りながら、古の風景に思いを巡らせることができたことは、楽しい追憶としてこれからも残っていくと思います。

最後に、お忙しいさなかにもいやな顔一つせず、私を助けてくださった奈文研の皆様へ改めて感謝し、両研究所の交流がさらに発展していくことを祈念いたします。

(大韓民国・国立慶州文化財研究所 鄭 太垠)

日本語訳：都城発掘調査部 高田 貫太)



平城宮東方官衙の現場にて（左が筆者）